

## ひまわりと一緒に心の花が咲くように

平成18年度「人権の花」運動  
「人権の花」運動（県人権擁護委員連合会主催）の実施校となった金田小学校で、4月27日にひまわりの種植えが行われました。2年生94人が花壇や中庭など3か所に、ひとつかみ2〜3個の種をていねいに植えつけました。前日には人権擁護委員による人権紙芝居も行われ、意識を深めたなかで、愛情を込めた共同作業が行われました。



↑大きなものは2Mにもなるひまわり、種をマリーゴールドで囲みました。

## 訪れる人を迎える人面岩

石鎚山の奇岩  
四国石鎚山から分神霊場として開場された石鎚山大権現（伊方）。その参道を200mほど上ると、右上側に大きな奇岩が顔を出しています。角度によって人の顔にも見えるこの岩は、まるで来る人を迎え入れているようにも見えます。情報提供は70歳のマラソンランナー・福田徳三郎さん（金田）、ジョギング中に発見したそうです。



↑興味深い形で特徴ある石鎚山の奇岩、意識して見れば気がつきます。

↑鳥尾峠を越えて伝わった獅子舞、クライマックスに口づけを交わします。



## 綿々と受け継がれる獅子と稚児の舞

南木菅原神社神幸祭  
5月2日・3日に南木菅原神社の神幸祭が行われました。豊作を願う舞いでは、きらびやかな衣装の稚児たちが昔の農作業を模した12の動作で輪を描きます。その中央で舞う獅子は、明治初期に筑前（飯塚市庄内町）の綱分から習い覚えたもので、豊前とは違い「静」の雰囲気の特徴。古来からの厳かな雰囲気を残す南木の伝統行事です。

↑今年で没後1年になる父・吉右衛門さんの軌跡をたどる永末修策さん。



## 吉右衛門さんの人柄と名作懐かしむ

永末吉右衛門追悼展ギャラリートーク  
繊細かつ華やかな作風で全国的に知られる故・永末吉右衛門さん（本名・晴美、豊前吉右衛門藩）の追悼展が、6月18日まで直方谷尾美術館で開かれています。4月22日に2代目の永末修策さんが「父 吉右衛門の世界を語る」と題して講演。駆けつけた150人以上のファンを前に、独自の技法にこだわり抜いた父の姿を懐かしそうに話しました。

↑幹周囲3.7mの迎接の藤、日の差す角度で色を変えます。人の少ない時間帯に撮影しました。



## 「定禅寺の藤」連体に見ごろ 迎接の紫を見上げて

定禅寺（弁城）の「迎接の藤」が、ゴールデンウィークに満開を迎え、県内外からの花見客でにぎわいました。県の天然記念物に指定されているこの藤は、樹齢500年以上の名木。庭園の800㎡もある藤棚一面には、1mほどの花房が滝のように下がり、周囲に甘い香りを漂わせていました。藤棚の下では、お弁当を広げたり、写真を撮ったり、スケッチに残す人なども見られ、頭上に迫る上品な紫色の花に見とれている様子でした。

## 初窯開きで窯出しの様子公開

高鶴窯で初窯第一回野外陶芸展  
4月24日に上野焼の高鶴窯が「初窯第一回野外陶芸展」を開きました。昨年完成した薪窯の初窯出しの様子を公開。70時間焼かれた200点が、見守る30人の目の前で1点ずつ取り出されました。焼成した高鶴勝也さんは「釉薬の渋みも出たし予想以上のできばえ、不安定な炎だからこそ名作ができます」と納得の笑みを浮かべました。



↑初窯の作品を手にする高鶴勝也さん、お客さんも臨場感を味わいました。

↑天狗は悪者という偏見で火あぶりにはされますが、真相が次第に明らかになる...



## 編見を暴く天狗の言葉が胸に響いた

劇団はぐるま座公演  
4月23日に「劇団はぐるま座公演」が地域交流センターで開かれました。偏見について親子で考えてほしいと実行委員会などが主催。1日2回の2部構成で、重話劇では「天狗の火あぶり」が上演されました。村で起きた事件の犯人と決めつけられた天狗が、真犯人の庄屋の悪事を暴く展開に、延べ約400人の視線が注がれました。